

二〇一九年度 田園調布学園大学

全学部全学科専攻 共通

# 国語 入学試験問題

一般入試B日程

受験番号

氏名

- (注意)
- 一、解答は、すべて別紙の「解答用紙」に記入してください。
  - 二、受験番号と氏名は、「問題用紙」と「解答用紙」の両方の所定の欄に必ず記入してください。
  - 三、「問題用紙」と「解答用紙」は、試験終了後、かならず提出してください。
  - 四、「問題用紙」に「下書き」「書き込み」などをしてもかまいません。
  - 五、試験時間は六〇分です。



(一) 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

わたしたちは、子どもに語ることで、昔話にはかなり親しんでいるつもりでした。けれども、リュテイ<sup>注1</sup>の a シテキを受けるまでは、わたしたちが、とりたててふしぎとも思わずに受け入れていた昔話のなかの出来事や描写が、文学の他のジャンル——たとえば、詩、劇、小説など、さらには同じ伝承文学でも伝説や聖者伝——には見られない昔話特有の表現形態であるとは、認識していませんでした。

リュテイは「二次元性」ということばを使って、昔話では、わたしたちが生きている日常の世界と、ものをいう動物や、魔女や妖精などが出てくる超自然的な世界との間に決定的な隔たりがないと感じている、と述べていますが、そういえば、昔話の主人公は、この世でありえない人物や出来事に出会っても少しも驚きませんね。森で狼に話しかけられた赤ずきんは、「どうしてこの狼は口をきくことができるのだろうか?」と、疑問に思ったりしません。ごく当たりまえのように会話をします。

グリムの昔話「おどつておどつてぼろぼろになつたくつ」<sup>注2</sup>の主人公の兵隊は、見知らぬ老婆から、それを身につけると姿が見えなくなるというマントをもらいますが、相手の素性をいぶかることも、マントの効果を疑うこともなく、ごく当然のようにこの贈りものを受け取ります。

海の底の竜宮に行くのも自由なら、空とぶじゅうたんであつという間に何千里離れたところへ飛ぶのも思いのまま。主人公たちは、そのこと自体をふしぎがることはありません。実際、語つていても、子どもから、この点について質問を受けることは、まずありません。

ビューラー<sup>注3</sup>は、子どもは、現実と非現実の世界を峻別せず、奇跡を無邪気に受け入れると述べていますが、たしかに、子どもの「ふしぎを受け入れる能力」は、おとなに比べて格段に高い。また、<sup>注4</sup>「何かを何かに見立てる力」「何かになったつもりになれる力」が非常に強い。おそらく、この遊びが①佳境に入っているときは、「つもり」ではなく、真にそのものになりきって、空想上の世界で行動していることでしょう。子どもにとっては、現実と空想の間にも隔絶はなく、両者のあいだを自由に往き来できるのは、子どもの特権といつていいのです。だとすれば、②この「二次元性」という昔話の特質は、まさに子どもにびつたり合ったものだといえるでしょう。

また、リュテイは、昔話の主人公には **A** が無いといえます。それは彼らに名前がないことからわかるでしょう。昔話に登場する人物は、ただ「男とおかみさん」、「王さまとお妃さま」であつて、名前がある場合でも「太郎、次郎、三郎」「ジャック」「イワン」など、性別や、兄弟の順を示すだけのものです。それらの人物の年齢、顔かたち、背格好、**B**、性格や、好みなどがくわしく描写されることはありません。せいぜい「世界一美しいお姫さま」「見あげるような大男」といった程度です。これらの人物は、ひとりの人間であるより、ひとつのタイプを示していると考えられます。

タイプである人物には、「いいおじいさん」と、わるいおじいさん、「やさしいおかあさんと、意地悪なママ母」「働きの姉に、**C**者の妹」というふうに性格も極端に色づけられています。現実社会では、善良と見える人が、別の場面ではずるく立ち回ったり、相手によっては悪意をもって行動したりと、ひとりの人間のなかに違う性質が重層的に存在しているわけですが、昔話では、複雑なものを単純化し、ひとつの性質をひとりの人物にあてはめ、そ

れをひとつの平面にならべて、違いを際立たせて見せています。リュティは、これを「平面性」と呼んでいます。単純になったことで、人の性質がつかみやすくなり、個性の縛りのないことで、聞き手（読者）の主人公との一体化が容易になります。これも、昔話が子どもに受け入れられやすい理由のひとつです。

没個性、単純な性格といいますが、D 子どもたちは、人の性格や、個性について関心を抱くほど、人間についての経験をもっていないのではないのでしょうか。おとなが小説を読むときの大きなたのしみのひとつは、登場人物の性格描写ですが、作中、ある人物の性格がどのように描かれるかといえば、「その人はかくかくしかじかの性格でした」と、まとめて説明されるわけではありません。あるところではその人の生まれや育ちが語られ、話が進むにしたがって、あるところではその人の服装や表情が、別のところでは、その人がだれかと交わす言葉が、また別の場所では、ある事態に際してその人のとった行動が述べられていきます。

読者は、そのように、作中のあちこちにちりばめられたその人物に関する「断片的な情報」を自分の頭の中で統合して、なおかつ自分が現実を知っているあれこれの人物を思い浮かべてそれと照らし合わせ、また人間一般についての知識や経験にもとづいた想像力でイメージを補いながら、少しずつ自分でその人物像をつくりあげていくのだと思います。

個々別々に与えられたいくつかの描写からひとつの性格、個性をもつ人物のイメージをつくりあげるには、大勢の人間に接した経験から学んだ知識や、イメージの蓄えが必要です。それは、子どもたちがまだもっていないものです。昔話は、子どものもっていないものEや推理力、F（力）に頼らず、子どものもっているもの（好奇心や

性格や個性がないとすれば、子どもをひっぱっていく昔話の最大の魅力はなんでしょう。それはストーリー、いかえれば主人公の行動です。お話を聞いているとき、子どもたちからもっとも頻繁に出される質問（無言のも含めて）は、H「G力、主人公と一体化する能力」に訴えて、彼らの人間理解を助ける文学なのだとはいえるでしょう。なかでも「なぜ?」「どうして?」といった理由や、動機ではないのです。子どもたちにとつては、主人公と冒険を共にすることが、昔話の醍醐味で、主人公の行動の動機や、事件の因果関係は、少なくとも聞いていない時点では問題になりません。それは、おそらく聞き終わったあと、心のなかで、なかば無意識のうちに辿られ、理解されるでしょう。

まるで子どもたちのそういう聞き方に合わせたように、昔話は、外から見える主人公の行動中心に語られ、彼らのこころのうを描くことはしません。リュティは、それを、昔話の人物は、「肉体も感情もたない図形のようなもの」だといっています。「肉体をもたない」ということは、からだに何か起こったときも、具体的な描写がないということです。

たとえば、さきあげた「七羽のからす」<sup>注5</sup>では、兄さんたちを助けたいと家を出た妹が、ながい旅の末、いよいよ兄さんたちがいるというガラスの山まできたとき、山の戸を開けるために、あけの明星からもらっていたひなどりの骨を失くしたことに気づきます。そこで妹は、代わりにナイフで自分の指を一本切り落として戸にさしこむのです。

高学年の、とくに女の子の聞き手のなかには、ここで、小さく「あッ」と声をあげる子もいるといいます。I、物語は、そのあと、「すると、戸は、うまくあきました。娘が中へ入っていくと、小さな小人が出迎えて……」とつづき、指にはなんの注意も払いません。痛かったとか、血が出たとかいう描写はまったくなく、話の終わり、救い出された兄さんたちとeイエジにつく場面では、娘の指が欠けていたなどという言葉はありません。③語り手も、聞き手も、そんなことは考えもしないのがふつうです。

実は、この点が、昔話が一見残酷と思われることからを扱いながらも、けっして残酷な印象を残さない大きな理由のひとつです。肉体も持たない主人公は、苦痛を感じる存在としては描かれませんが。「ヘンゼルとグレーテル」で、魔女がかまどで焼かれるとか、「白雪姫」で、お妃が真っ赤に焼いた鉄の靴をはいて死ぬまで踊らされるとかいった場面は、そこだけをとりあげると残酷なようですが、話自体は、残酷さに興味を示してはいません。J、そのとき、当事者が悲鳴を上げたとか、肉の焼ける臭いが辺りにたちこめたとかいう描写は一切ないのです。「感情をもたない」という、もともといい例は、「いばらひめ」<sup>註6</sup>でしょうか。百年の眠りからさめたとき、姫の目には、若い王子の姿が映ったはずですが、それをみて、姫がどう思ったか、物語はまったくふれませんが。「王子は、身をかがめて、姫にキスをしました。K、姫はぱっちりと目を開いて、やさしく王子を見上げました。そして、ふたりはいつしよに、階段を降りていきました」というだけです。

これももし小説なら、眠っている姫を見て、王子がどう思ったとか、目がさめたとき、自分をのぞきこんでいる王子を見て、姫のこころにどんな感情がわきおこったかなどが細かく描写されることでしょう。昔話は、ふたりの感情には一切立ち入らないのです。

(松岡享子『子どもと本』より)

注1 マックス・リュティ (1909-1991)。スイスの民間伝承文学の研究者で、『ヨーロッパの昔話』の著者。

2 グリム童話の一つ。

3 シャーロット・ビューラー (1893-1974)。ドイツの発達心理学者で、『昔話と子どもの空想』の著者。

4 この後に原文では「二章で触れたように、」とあるが、省略した。

5 グリム童話の一つ。筆者は問題文とは別の部分でこの作品を紹介している。

6 グリム童話の一つ。「ねむりひめ」という絵本にもなっている。

問一 二重傍線部 a e について、漢字はその読みをひらがなで答え、カタカナは漢字に改め、楷書で正確に書きなさい。

問二 傍線部①「佳境に入っている」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 面白さが頂点に達している
- イ 結末を迎えようとしている
- ウ 手が離せず他に目が向けられない
- エ 想像の世界に入りこんでいる
- オ 物事がうまく進んで喜んでいる

問三 空欄Aに適する語を本文中から選んで入れなさい。

問四 空欄B、D、I、J、Kに入る最も適当なことばを次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア さらに
- イ しかし
- ウ すると
- エ そもそも
- オ なお
- カ つまり
- キ ところで
- ク なぜなら

問五 空欄Cに入る適切なことばを自分で考えて入れなさい。

問六 空欄E、F、Gに適する語を次の中から、それぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア 技術
- イ 空想
- ウ 経験
- エ 構成
- オ 常識
- カ 説得
- キ 直感
- ク 瞬発



問九 傍線部③「語り手も、聞き手も、そんなことは考えもしないのがふつうです」とあるが、なぜか。その理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 昔話の聞き手である子どもたちは、人間一般についての知識や経験にもとづいた想像力が十分に育っていないため、語り手もそれを意識して語っているから。

イ 昔話の聞き手である子どもたちは、話の展開にあまりにも夢中で、残酷さに興味を示す余裕はなく、語り手も残酷な場面をくわしく語ることを避けたいから。

ウ 昔話の聞き手である子どもたちは、話の主人公になりきっていて、苦難を乗り越えるための残酷さを何とも思わず、語り手も子どもたちの気持ちが変わっているから。

エ 昔話の語り手も聞き手も、登場人物を現実的な人間としてではなく、肉体も感情も持たないもののようにとらえ、興味の中心は話の展開、主人公の行動にあるから。

オ 昔話の語り手も聞き手も、ストーリーや主人公の行動にもつばら興味があり、事件の因果関係や主人公の行動の動機はどうでもよいと思っているから。

問十 右の文章の趣旨に合うものを、次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 昔話は人物の性格をかくかくしかじかと説明するが、小説は作中のあちこちにちりばめられた、その人物に関する「断片的な情報」を自分の頭の中で統合して考える。

イ 昔話も伝説も前の時代から次の時代へと伝えられる文学ではあるが、その表現形態という面では大きな違いがある。

ウ 昔話では、心やさしい人物が、ある出来事が起こって意地悪い人物になったとしても、最後は心を入れ替え、元のやさしい人物にもどる。

エ 小説を読むときに登場人物の性格描写を大きなたのしみとしているおとなにとって、没個性、単純な性格の人物ばかりが登場する昔話は面白いものではない。

オ リュティは、昔話の特質として「二次元性」「平面性」をあげ、その特質によって子どもがすんなり昔話を受容できるようになっていると考えている。



(二) 次の文章は、黒井千次の小説「そろろう泉園」の一節である。洋太郎は八月末、滄浪泉園へ散歩に行き、園内の休憩所に置いてあるノートを讀んだ。そこには見覚えのある字で、「もう一度だけ来てみよう、今度は九月の敬老の日に。思い出が老い果てたのを確かめるために。」とあった。以下の文章を讀んで、後の問いに答えなさい。

その日は朝から雨だった。お茶の先生に贈る①古稀の祝いの品を仲間と見立てに行く滋子<sup>キ</sup>が昼前に出かけてしまうと、洋太郎は家に一人残された。やがて、立つにつけ坐るにつけ、敬老の日にもう一度だけ再訪する、と書かれていたノートの癖のある字が眼の前にちらつき出し、新聞を讀んでも、テレビを觀ても、内容が頭にはいらなくなった。

二時を過ぎると自分の苛立ちに敗け、遂に洋太郎は心を決めて家を出た。空は少し明るくなったのに、そこから細かな雨がしきりに落ちて来る。雨の日にあの庭を訪れるわけだな、と西村<sup>キ</sup>の言葉を思い出しつつ足早やに踏切りを渡り、幾つかの傘を追い越した。気がつくと、周囲を歩いているのはみな老人だった。上体だけが前に急ぎ、足がそれを追いかけるように進む人々は、二人、三人と左手の公会堂に吸い込まれて行く。丸い屋根をもつ建物の正面には「祝・小金井市敬老会」と書かれたa横断幕が掲げられ、受付の机に積み上げられた記念品らしい白い箱の山が見えた。

公会堂を通り越した後は、向うから来る老人達と擦れ違った。布の手提袋を持って遊ぶようにゆっくりと歩く老婆もあれば、連れの男を引き立てる足取りで近づく灰色の傘もある。どの顔も表情は乏しく固かった。洋太郎は道の端に身を寄せて先を急いだ。

消防署の前には大きな日の丸が黙って垂れていた。雨にAた工業高校の庭で、季節外れの紫陽花が所々に弱々しい花を咲かせている。もしやバス通りで滄浪泉園から帰る人にごぶつかるとはならないか、とひそかに恐れていた洋太郎だったが、そこまで来るとアスファルトの道路に溜った水を踏み潰して走る車の他に、通行人の姿はほとんど認められなかった。

小さな標識の前を左へ折れた先にはもう動くものはなにも一つなく、濡れた緑がBだけだった。長屋門<sup>注3</sup>の管理事務所の窓口では声を出すのも②憚られ、洋太郎は無言で百円玉を差し出した。事務所の中にも眼鏡をかけた瘦せた老人だった。今日は朝から入園者が幾人くらいいたのか、と訊ねてみたい気持ちで頭を擡げた<sup>もた</sup>が、洋太郎はその質問を呑みこんで石畳の坂に足を踏み入れた。木々の枝に空を覆われた坂は夕暮れのように暗く、高い葉に集められては落ちる水滴が、時々あちこちの熊笹の葉を唐突に揺すっている。

樹木のトンネルを脱け、休憩所のある平地に出ても人影はなかった。すぐそこに歩み寄りたい気持ちを抑え、建屋の中に誰もいないのを③遠目に確かめてから彼は池へ下りる小道に向った。これほど人の気配がないのなら、他に入園者がいるかどうかを自分で確認しておきたかった。道は池を巡るただ一本でCはないのだから、急ぎ足に歩けばさほどの時間はかからずにまた休憩所のある平地に戻って来られる筈だった。

石段のある小道にはいると重い雨をのせた青木や馬酔木の枝が両側からかぶさり、傘を開いたまま進むのが難しい。足を踏み滑らぬように注意しながら

下りた先に短い木橋がある。先日は気づかなかったが、池とは反対側の橋の下でしきりに水音がする。しかしそちら側は鼻がつかえそうな近さに崖が迫って水はない。としたら、崖の根にあたる橋下からも水が湧いているに違いない。その水の流れ込む池を傘の下からゆっくりと眺めた。

晴れた日とは異り、大気を煙らせる雨に誘われたかのように池は丈の低い灌木かんぼくの間に静かに浮き上って見えた。そして水際に沿った小道のどこにも、傘が開いてもいなければコートコートの影もない。ただ豊かで慎しやかな拡がりひろがりが暗い緑に濡れて眼の前に横たわっているだけだ。

歩く前方からまた水音が伝わって来る。「ハケ」注4の立札のある飛石飛びいしの場所だった。ここ二、三日天氣がぐずずついて雨がちだつたためか、この前とは比べものにならないほど湧水の量が増し、石の表面が洗われている。それでいて、静寂しじやくそのものが流れ出ているとしか思えない。

不思議な場所だよ、と呟いて洋太郎は石を飛んだ。馬頭観音注5のある坂を進み、池を見下す道をくだればもうそこは鯉の群れる土橋であり、石地藏の前を過ぎて最後の石段を登り切ると休憩所の前の狭い平地だった。

池の対岸に眼をやったり、時折は振り返ったりしながら歩いたが、結局雨の庭には人っ子ひとりいなかった。今はこの庭園が自分だけのものになった気がして洋太郎は大きく息を吸い込んだ。線路の北側にある家が遙か彼方に思われた。バス通りから切り離され、長屋門からさえ遠く断たれて彼はただ雨に

**D** ているのを感じた。久しく身に覚えのない怖いような感覚だった。吸い寄せられる足取りで彼は休憩所に向っていた。あまりに人が少ないためにもしや置かれていないのではないかと恐れた大学ノートは、腰掛け板の上に無造作に投げ出されていた。それを手にすると洋太郎は入口に近い明るい場所に腰を据えた。湿気を吸ってひんやりとしたノートは、もう他人のものではなかった。最初のページから、彼はゆつくりとめくり始めた。

読み覚えのある文章が続き、やがて「つまんなかった」と口を尖らせて歌う子供が現れる。そして乗用車かバイクの型式が登場し、「某月某日 池にカルガモが……」と記された棘とげが突き刺さって来る。宛名もない手紙のような一文を、「幸」という名前まで彼は丁寧に読み返した。二度目であるためか、言葉は自然にしつとりと身体にしみ込んだ。

その後は、また蚊の苦情であり、「ハケ」の水が飲めるかどうかを明示せよとの注文であり、型通りの自然讃歌であり、感謝の意の表明であり、「うんち」とだけの落書きであり、日付は十日、十一日、十二日と進み、文字のあるページの残りはどんどん少なくなっていく。あの忘れようもない字をノートの上に求めているのか、拒んでいるのか、自分の気持ちこころが掴めない。そして次はもう④白いページになるという直前だった。あの鋭く傾いた懐かしい棘の連なりがいきなり眼に飛びこんで来た。

「九月十五日 雨

私は来ました

幸

それだけだった。洋太郎は呆然として顔をあげた。たった一行の言葉が周囲の雨を孕はらんでノートの上に生々しく膨み返っていた。……幸はそんなぶつきらばうな棘を埋めた短い葉書や手紙をよくくれた。一目で読める一行で、**E** 彼にはそれを書いてある幸の掌の湿りから胸の鼓動までが感じられた。ただ一行記された便箋が出て来る度に、今までそこに寝ていたような幸の温もりが封筒の中いっっぱいにこもっているのを彼は味わった。それで総てが通じ合う、と信じていられる時期があった。彼の手紙はいつも長かった。⑤彼が幸の真似をしたのは、最後の手紙だけだった……。

雨が激しくなっていた。庇<sup>ひさし</sup>から落ちる滴がしきりに光っては低い壁の外に水音を弾かせた。それにしても、いつこれを書いたのだろう、と洋太郎が吹き抜き越しに庭の正面の樹木の梢を眺めやった時、眼の端をなにか黒いものが動いた。驚いて振り向いた瞬間、石畳の道を包む熊笹の陰に黒い傘がすつと消えた。

一叫びをあげて彼は休憩所を飛び出し、雨に打たれて石畳の道へと走った。dユルく右へ曲る坂道は静まり返り、傘の影はおろか、なにかがそこを通った気配さえない。一息に坂を駆け上った彼の前にあったのは、雨の中にゆつたりと蹲<sup>うずくま</sup>っている長屋門の姿だけだった――。

引き返した休憩所の中で、その後どれほどの時間を過したのか覚えていなかった。水の滲み込んだ靴で足が冷えたためか気温が低下したのか、急に忍び寄って来た寒さを堪えながら、彼は幾度か紐に繋がれたボールペンを掴んでは自分もノートに一言書きつけようとした。九月十五日、雨……とそこまでは言葉が浮かんでも先が続かない。ノートをのせた膝をeコキザみに揺すっていると、順路の前にも後にも人はいなかったのに

F がどこから現れた

のかが奇妙でならなかった。にもかかわらず、なぜか彼は最初にノートを見た時のようには怯<sup>おび</sup>えていなかった。俺には書けはしないのだ、と最後に諦めてノートを膝からおろし、傘を拡げて休憩所を出る頃には、園内に早くも濃い夕暮れの色が雨に溶けて漂い出ていた。

注1 洋太郎の妻。

- 2 洋太郎が見合いの世話をした若者。
- 3 江戸時代の武家屋敷などで、両側に細長い形の家を備えた門。
- 4 地形名。丘陵地の片岸。
- 5 多く日本庭園に見られる、少しずつ間隔をおいて並んでいる石。
- 6 仏教における観音の一つ。

問一 二重傍線部 a s e について、漢字はその読みをひらがなで答え、カタカナは漢字に改め、楷書で正確に書きなさい。

問二 傍線部②「憚られ」、③「遠目に確かめて」について、本文中の意味として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

② 憚られ

- ア さしつかえがあるとして、避けて
- イ 恐ろしいと、おじづけづいて
- ウ さしさわりがあるとして、遠慮し
- エ 申しわけないと、卑屈になって
- オ 緊張してかしまって

③ 遠目に確かめて

- ア 物陰から見確認して
- イ 望遠鏡で見確認して
- ウ 眼を細めて見て確認して
- エ 間接的に映像を見て確認して
- オ 距離をおいて見て確認して

問三 傍線部①「古稀」は数え年何歳の称か。次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 六〇歳    イ 七〇歳    ウ 七七歳    エ 八〇歳    オ 八八歳

問四 空欄 A・D には共通の言葉が入る。最も適当な語を、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 守られ    イ たたられ    ウ 冷やかされ    エ 包まれ    オ 囲まれ

問五 空欄Bに入る最も適当な語を、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 枯れている
- イ 眠っている
- ウ 歌っている
- エ 楽しんでいる
- オ 落ち込んでいる

問六 空欄Cに入る最も適当な語を、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 合流点
- イ 活路
- ウ 茨の道
- エ 窮地
- オ 岐路

問七 傍線部④「白いページに変わる」とあるが、それはどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 臭いのない清潔なページになる
- イ 美しい字で書いてあるページになる
- ウ 何も書いていないページになる
- エ 最後のページになる
- オ 染みのないページになる

問八 空欄Eに入る最も適当な語を、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア たとえば
- イ なお
- ウ しかし
- エ よって
- オ やはり

問九 空欄Fに入る最も適当な語を、本文中から三文字で抜き出しなさい。

問十 傍線部⑤「彼が幸の真似をしたのは、最後の手紙だけだった……」とあるが、どういふことか。六五字以内で説明しなさい。(句読点を含む)  
(下書き用)


(三) 次の文中の空欄にあてはまる最も適当な語句を選択肢の中から一つ選び、記号で答えなさい。

① ( ) と受け継がれてきた伝統芸能に魅了される。

- ア 続々
- イ 連綿
- ウ 恋々
- エ 連々

② 突然の彼の告白に、彼女は鳩が ( ) 鉄砲を食ったような顔をした。

- ア 石
- イ 水
- ウ 豆
- エ 無

③ 社長は、ゴルフを ( ) ことがおありですか。

- ア 行った
- イ いたした
- ウ なさった
- エ やった

④ ( ) をお送りいたしましたので、ご批評いただければ幸いです。

ア 御論      イ 拝論      ウ 自論      エ 拙論

⑤ 彼らの音楽は、メロディーは魅力的だが、歌詞の内容が ( ) でつまらない。

ア ステレオタイプ      イ プロトタイプ      ウ セラミック      エ プラスチック

⑥ 今年の陸上大会で、去年の雪辱を ( ) つもりだ。

ア 破る      イ 果たす      ウ 晴らす      エ 奪う

⑦ 海外赴任が決まり、彼は「立つ」 ( ) 跡を濁さず」の精神で、仕事を片付けた。

ア 馬      イ 魚      ウ 人      エ 鳥

⑧ 彼女が最近妙に ( ) 態度をとると思っていたら、ふられてしまった。

ア よそよそしい      イ すがすがしい      ウ さむざむしい      エ くどくどしい

⑨ 手続きが ( ) で、途中で投げ出してしまった。

ア 雑然      イ 煩雑      ウ 煩悶      エ 乱雑

⑩彼女のテニスの腕は、玄人（ ）だ。

ア もどき      イ さらし      ウ はだし      エ ばなれ



